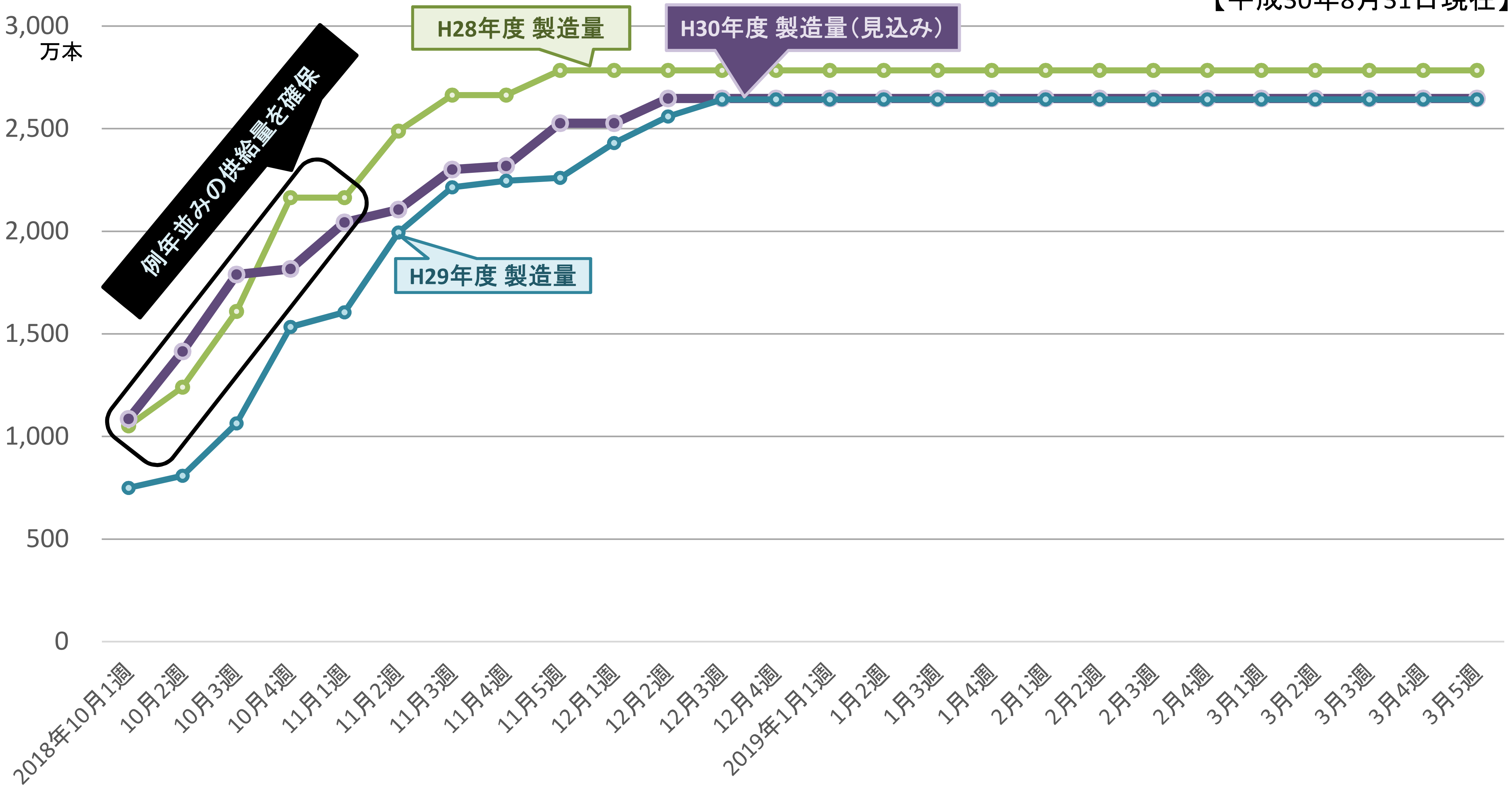
資料2

2018/19シーズンの
インフルエンザワクチンの供給について

2018/19シーズンのインフルエンザワクチンの供給について （その１）

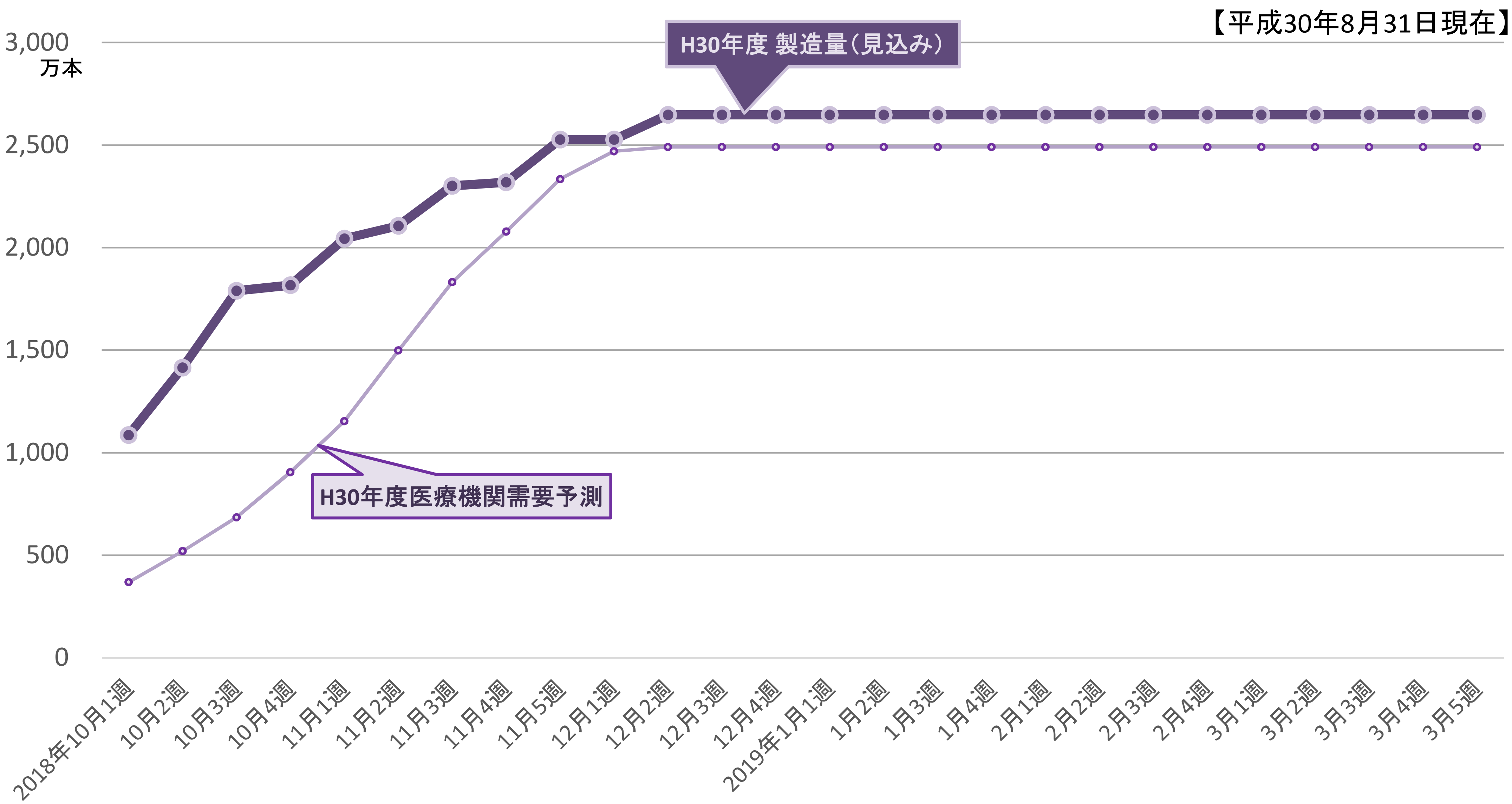
○ 今シーズンのインフルエンザワクチンは、接種シーズンの開始時期である10月当初は例年並みの約1千万本の供給を見込んでいる。

【平成30年8月31日現在】



注）供給量は、いずれも1mL換算。

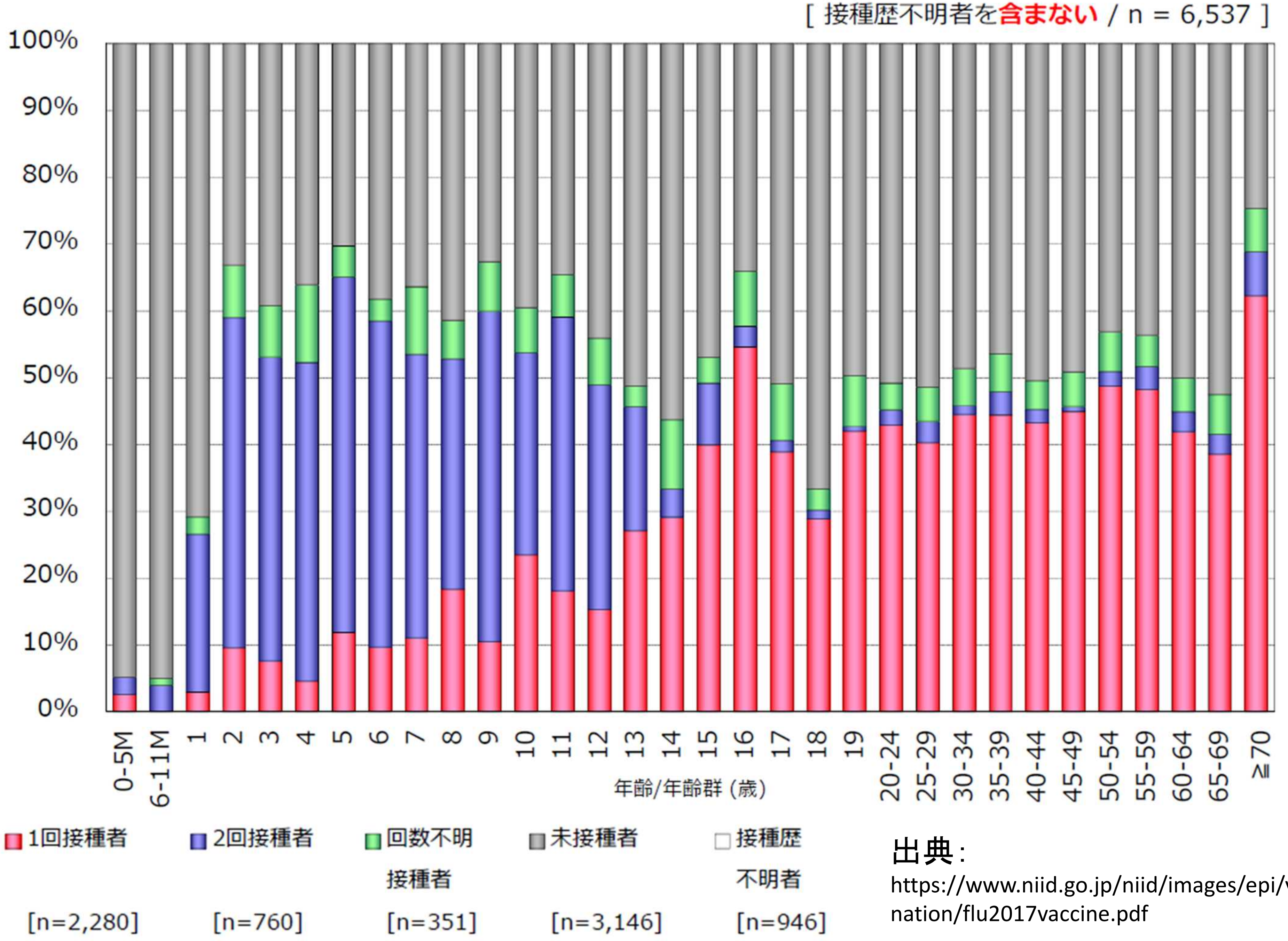
（参考）2018/19シーズンにおける累積供給予定量見込み/医療機関需要予測



注1）「H30年度医療機関需要予測」は「H28年度使用量」に、13歳以上の者について、医師が特に必要と認める場合を除き「１回注射」であることを周知徹底した場合の影響、及び効率的な活用の徹底を考慮した推計値
注2）供給量は、いずれも1mL換算。
注3）使用量には返品分が含まれない。

（参考）年齢/年齢群別のインフルエンザ予防接種状況，2016/17シーズン

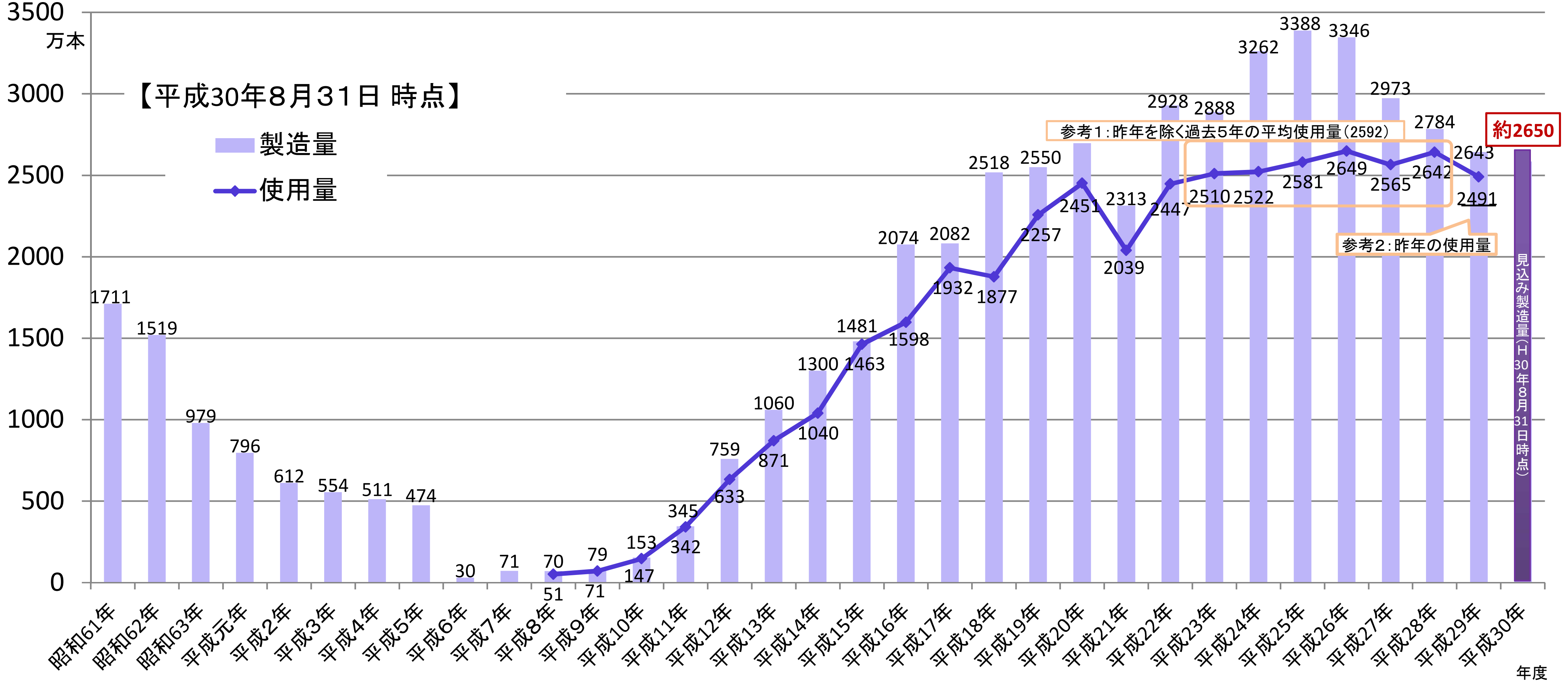
～2017年度感染症流行予測調査より～



出典：
https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/yosoku/Vaccination/flu2017vaccine.pdf

2018/19シーズンのインフルエンザワクチンの供給について （その２）

○ インフルエンザワクチンの見込み供給量（約2,650万本）には、昨年の使用量（2,491万本）や昨年を除く過去５年間の平均使用量（2,592万本）を上回っている。



※1 平成7年以前の使用量は不明 ※2 1ml換算

（参考） 今シーズンのウイルス株選定の経緯

第1回季節性インフルエンザワクチンの製造株について検討する小委員会※1（2018年4月11日）において、以下の基本的考え方に則り、B型ビクトリア系統について、2つの製造候補株※2からメリーランド株を選定した。

※1　第1回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会 研究開発及び生産・流通部会 季節性インフルエンザワクチンの製造株について検討する小委員
※2　B/コロラド/06/2017（コロラド株）、B/メリーランド/15/2016(NYMC BX-69A)（メリーランド株）

＜基本的考え方＞
製造株の選定にあたっては、原則として世界保健機関（WHO）が推奨する株の中から、期待される有効性及びワクチンの供給可能量を踏まえた上で、双方を考慮した有益性（4種類の製造株に係る有益性の総和）が最大となるよう検討を行う。

＜論点＞
① 有効性について
・動物試験（フェレット感染血清を用いた抗原性解析）の結果
・ヒトにおける情報（疫学、臨床研究）

② ワクチンの供給可能量について
・シーズン通算の需給状況予測
・12月中旬時点における需給状況予測

12月中旬時点の見込み供給量

・4/11時点の推計：メリーランド株 2,659万本 （コロラド株では、2497万本） （⇒B型ビクトリア系統について、2つの製造候補株からメリーランド株を選定）

・8/31時点の推計：約2,650万本（＝今シーズンの総供給見込み量）

シーズン	医療機関納入量	4/11時点のメリーランド株の推計	8/31時点のメリーランド株の推計【最新値】	（参考）4/11時点コロラド株の推計
2017/18（H29年度）	2,271万本	○	○	○
2016/17（H28年度）	2,620万本	○	○	×
2015/16（H27年度）	2,558万本	○	○	×
2014/15（H26年度）	2,620万本	○	○	×

注1）値はいずれも12月中旬時点　注2）供給量は、いずれも1mL換算
注3）「○」は医療機関納入量＜見込み供給量の状況

2018/19シーズンのインフルエンザワクチンの供給にかかる評価と対応

今シーズンのインフルエンザワクチンの供給について

○ 今シーズンのインフルエンザワクチンの見込み供給量（約2,650万本）については、10月当初の供給量（例年並みの約1千万本）、ウイルス株選定の経緯、近年の使用量等から、ワクチンを適切に使用すれば、不足は生じない状況と考えられるのでないか。

今シーズンを含む今後の対応（案）

○ インフルエンザワクチンの効率的な使用と安定供給を推進するため、今後の対応として、
① 13歳以上の方は原則１回注射としていただくこと
② 必要量に見合う量のワクチンを購入いただくこと
などについて医療機関に要請する等の取り組みを継続することとしてはどうか。

（参考）昨シーズンの対応の概要

○ 昨シーズン（2017/18シーズン）のインフルエンザワクチンの供給については、主に以下２点を医療機関に要請した。

・ 13歳以上の方は原則１回注射としていただくこと
・ より効率的なワクチンの活用を徹底するため、必要量に見合う量のワクチンを購入いただくこと